Dokkyo Journal of Medical Sciences
32(3)：161，2005

特　集

特集「がん」によせて

菅谷　仁

編集委員会において特集号のテーマとして「がん」が取り上げられ，その編集を越谷病理の上田善彦先生と共に担当させて頂いた．今回癌でなく「がん」にしたのは一般的な概念の悪性腫瘍についてのことを含めたからである．これについては病理の小野先生，胸部外科の長井先生が本文のなかで少しコメントされている．

さて「がん」は非常に広いテーマであり，本学の基礎・臨床の教室に多数の原稿をお願いしようと上田先生と相談をしたが，必ずしも満足のいく企画にはなっていない．その理由の一つには壬生，越谷の両院に各々の分野の専門家がおり，企画上割り振りを行ったからである．ご不満の先生がおられたらお詫びをし，別の機会に原稿を戴けたらと考えている．最近医療情報はインターネットを用いれば容易に知ることができる時代であるが，本学の「がん」の研究・診療の一端も含めて知って頂きたいというコンセプトで11名の先生に執筆をお願いした．細かい内容については各執筆者の裁量に委ねてあるが，トピックスの記述もお願いし結果として個性のある原稿を頂戴できた．

「がん」については発癌の機序は一部のもので明らかになりつつある．遺伝子レベルでの異常が明らかになるにしたがい，治療も大きく進歩を遂げている．また診断法など，例えば今回はPETなどを入れる事ができなかったが，大分様相が変化している．この特集の内容については臨床主体であり，日常臨床でよく遭遇する「がん」を選択した．統計的に死亡者の数の多い肺，胃，乳，肝，大腸に加え子宮，前立腺の癌を取り上げた．また白血病，小児のがんについても執筆をお願いし，基礎分野では病理の一つのみになった．手前味噌で申し訳ないが，肝癌については移植もクローズアップされており，内科，外科の二つの原稿を依頼した．以下に本特集の内容について簡単に紹介する．

胃癌については消化器内科の渡辺秀考先生が*Helicobacter pylori*と癌，内視鏡による治療を中心に記述されている．肺癌は日本の癌患者死亡原因の一位であり胸部外科の長井千輔先生が化学療法も含めて動向を述べている．乳癌は越谷外科の小島誠人先生が治療の選択の拡がり，患者さんのQOLの向上，乳房温存手術について強調されている．子宮癌は産婦人科の坂本尚徳先生が頚癌の発癌要因としてのHPV（ヒトパピローマウイルス）感染，手術＋化学療法などについて記述している．前立腺癌は増加率の高い癌として認識され，PSAによる診断，MRS，治療，予防などに関して泌尿器科の深堀先生が詳述されている．白血病については血液内科の新井幸宏先生に執筆頂き，遺伝子病としての概念，それに伴う治療の進歩，移植を含めた治療成績の向上が述べられている．小児の癌については越谷小児外科の池田均先生が神経芽腫，胚芽腫，ウイルムス腫瘍，横紋筋肉腫につき，遺伝子異常を含めた詳細なレビューを書かれている．肝癌については内科，外科の両方から原稿を頂き，消化器内科の飯島誠先生からはB,C型肝炎ウイルス持続感染での発癌リスクの増大，インターベンションを含む治療などが述べられ，第二外科の窪田敬一先生は自験手術例の具体的な成績を示され，さらに移植についても記述して頂いた．大腸癌も増加を示している癌であり，第一外科の椿昌裕先生が化学療法も含めた治療を中心にまとめられている．病理学人体分子の小野祐子先生は癌の形態診断，さらに免疫組織化学，遺伝子工学的検索方法についても記述して頂いた．

今回の特集で「がん」の最近の様々な進歩を知って頂き，診療に少しでもお役に立てていただければ編者として幸いである．最後に忙しい中原稿執筆を快く引き受けて下さった先生方に厚く御礼申し上げる．